

## 青森県内初記録 カイギュウ化石



カイギュウ肋骨片(最大幅14.0cm、重さ520g)

当館が収蔵する化石標本「象牙の一片(受入番号1009)」について調査研究を行ったところ、形態や破断面で観察される骨組織の特徴から新たにカイギュウの肋骨片であることがわかり、令和6年3月発行の当館研究紀要に報告しました。また、カイギュウ化石としては県内初記録であるため、同年5月9日に報道機関向けの発表を行ったほか、5月25日には一般向け土曜セミナーを、6月4日には深浦町立修道小学校で特別出前授業を行いました。

この化石標本に貼られていたラベルの内容には、青森師範学校で博物学を教えていた和田千蔵<sup>わた かんぞう</sup>教授が昭和22年8月に修道小学校の平山校長から貰<sup>もら</sup>い受けたもので、深浦町大戸瀬の貝化石採掘場から産出したとありました。また、これ以外の情報を得るため文献調査を行ったところ、修道小学校周辺には海底に堆積した北金ヶ沢層(約300万年前)が分布すること、同校近くには貝化石を採集できる崖があったことから、そこが産出場所と考えられました。

化石の破断面で観察される骨組織には、カイギュウの特徴である緻密質<sup>ちみつ</sup>の部分がありましたが、中心部にスポンジ状の海綿質があることから子どものカイギュウと推定されました。現在のカイギュウには、熱帯や亜熱帯に生息するジュゴンやマナティがいますが、地質時代には寒冷な気候に適応して大型化した種が日本にも生息していたことが化石からわかっています。当館のカイギュウ化石の年代が300万年前頃と考えられ、この時代にはヒドロダマリスというグループのダイカイギュウが生息していたことから、この化石も同じグループのダイカイギュウだったことが推定されます。(自然担当 島口天)

※化石の詳細については当館ホームページ内の研究紀要第48号をご覧ください。

## ■ 特別出前授業 — カイギュウ化石発見の地へ！ — ■

令和6(2024)年6月4日、深浦町立修道小学校5・6年生児童19名を対象に、県内初記録となるカイギュウ化石について、特別出前授業を行いました。同校で授業を行ったのは、この化石を最初に所有していたのが77年前の校長・平山時宝先生だったことによります。

授業ではまず、カイギュウという動物について理解することから始まりました。現在地球上に生息するカイギュウには、マナティやジュゴンがありますが、児童たちはその聞きなれない名前から、イルカとアザラシを融合させたような姿や、鯨から手が生えてきたような微笑ましい姿を想像するなど、楽しそうに予想する姿が印象的でした。

次に児童たちはこのカイギュウ化石が77年前にこの修道小学校付近で発見されたのではないかという話を驚いた様子で聞きながら、カイギュウ化石とされた理由などについても理解を深めました。なお、当日は関係者の参観や報道機関の取材もあり、児童たちにとっては少し緊張しながらの授業となったようです。

その後全員、実物大のダイカイギュウ図(学芸課職員作・下左)を用意した部屋に移動し、全長7m、縦2.2mの巨大な姿に「すごい、こんなに大きいんだ。」と驚いて見ていました。

修道小学校5・6年の児童たちはとても熱心に講師の話の聞き、普段は、触れることができない化石資料を持ち感触を確かめるなど、最後まで意欲的でした。(教育普及担当 中沢秀一)



実物大のダイカイギュウ図を前に



カイギュウ化石に触れる

## ■ 2024 ジオパーク全国大会下北大会(会場:むつ市克雪ドーム) ■

### ポスター発表 — メガロドンとムカシマンモス —

8月30日～9月1日にむつ市で開催された第14回日本ジオパーク全国大会下北大会において、下北ジオパークの尻屋崎・中野沢・風間浦エリアに関連した当館所蔵化石を紹介するポスターを作成し、発表しました。

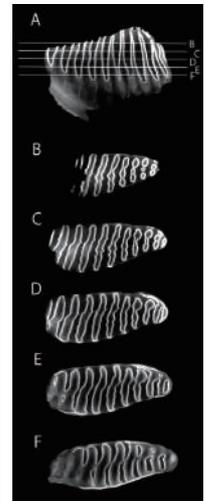
これらの中で、尻屋崎エリアで産出するメガロドンという二枚貝化石からは、尻屋崎エリアを構成する岩石に後期三畳紀(約2億年前)の石灰岩が含まれることが示唆されること、中野沢エリアで発見されたゾウの臼歯化石が、X線CT装置を使用した内部形態の観察により110万～70万年前に生息していたムカシマンモスの臼歯であることを解明したことを紹介しました。

ポスターの前で来場者に紹介できる時間は短時間でしたが、県内外のジオパーク関係者及び一般来場者の方々に、下北地域で採取された化石の希少性と当館の調査研究活動について伝えることができました。

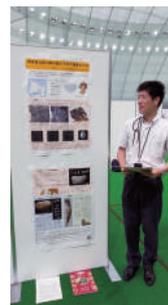
また、会場ではさまざまなプログラムが用意され、9月1日が「防災の日」ということもあり、各ジオパークでの災害対策なども紹介されていました。参加者はそれぞれの地域の大地の特徴を知ること、起こりうる災害を予期し対策を講じることができるということを学びました。(自然担当 原裕太郎)



ムカシマンモス  
右下顎第3大臼歯 頰側(最大幅約16cm)



X線CT装置による  
スキャン画像



ポスター発表



メガロドン科小型種が密集した石灰岩  
(白いレリーフ状の模様が貝殻)

## ■ 共催事業報告 ■

### 東北大学大学院生命科学研究科附属浅虫海洋生物学教育研究センター創立百周年記念事業

今夏、創立百周年を迎えた青森市浅虫にある東北大学大学院の海洋生物学教育研究センター（前身は浅虫臨海実験所）の記念行事に共催し、6月8日（土）から19日（水）まで、同センター会議室で絵はがきなどの関連資料を紹介しました。15日（土）に行われた記念講演会（会場：道の駅「ゆ〜さ浅虫」）では、海洋生物学研究の関係者の方々とともにこれまでの研究活動や周辺地域の歴史をひもときました。

## 絵はがきからみた旧浅虫臨海実験所（水族館）

絵はがきは各地の名所を題材として製作されることが多く、大正13（1924）年に開設された東北帝国大学理学部附属浅虫臨海実験所とその附属水族館の写真絵はがきも、様々な構図・内容のものが発行されています。

この2枚の写真絵はがきは、実験所と水族館の開設直後にあたる、大正末期から昭和初期のころの発行とされています。①には陸奥湾を背景に、沿岸の裸島とその近くの海岸に建つ実験所、さらにその手前に水族館が写っています。南方の丘陵頂上付近から撮影した写真で、両施設を紹介する代表的な構図のものです。

②は水族館の外観をとらえたもので、特徴的なアーチ型の屋根や窓、壁面のレンガタイルの装飾が写っています。正面入口上部の窓にはステンドグラスも埋め込まれていました。

実験所には国内外から研究者や学生が、水族館には県内外から多くの観覧者が訪れました。その他、敷地入口付近に設置された猿小屋の見学や、海辺の散策、潮干狩りなど、周辺一帯が観光・行楽の場所となりました。

（歴史担当 滝本敦）



①（浅虫温泉）東北帝国大学臨海実験所及水族館全景



②（浅虫温泉）東北帝国大学臨海実験所附属水族館

## 実験所初代所長・畑井新喜司とゆかりの資料

実験所の設立に尽力し初代所長を務めた平内町小湊出身の動物学者・畑井新喜司（1878～1963年）—当時の東北帝国大学に招かれアメリカから帰国した畑井は、海洋生物学の研究と教育のために実験所の必要を強く主張しました。彼はその設置候補地の条件として、豊かで多様な生物相が見られるとともに、交通の利便性や子弟の教育面等、研究者本人だけでなく、家族の生活環境の良さを重視しました。こうした条件に適ったのが、はからずも幼い頃から慣れ親しんだ故郷浅虫の海でした。

本事業では、愛用の眼鏡やミミズ研究者として人々にわかりやすく説いた著書『みみず』（改造社・1931年）等を紹介しましたが、岩石標本（写真）は特に関係者間で注目されました。「浅虫臨海実験所 畑井新喜司 昭和二年八月採集」の注記から、採集場所について、当館ではこれまで実験所付近と推定してきました。しかし、場所ではなく当時の自身の所属を記したのではないかという意見が出ました。そうだとすれば、採集場所はどこで、その目的は何が一様な情報を整理すると、採集年月の記載がこの岩石標本の背景を知る手がかりになりそうです。さらに確認調査を進めていきたいと考えています。

（歴史担当 太田原慶子）

右が、畑井が保管していた岩石標本。本人が採集したと考えられる。採集場所等詳細は不明。

○岩石名：凝灰質泥岩（火山灰混じりの泥からなる岩石）

○地層：和田川層と考えられる。

和田川層は深海に堆積した頁岩などを主とし、薄くはがれやすい。

本標本は、割れ目に貝殻状断痕が見られず、表面に凹凸があることから頁岩とは言えず、頁岩に挟まれた凝灰質泥岩と考えられる。



畑井新喜司



青森県の自然や歴史をわかりやすく紹介する土曜セミナー。今年度の会場は、青森県総合社会教育センター研修室で全11回を実施します。

8月31日(土)に行われた第4回「つがる市出身の洋画家・松木満史が描いた世界」では、郷土の洋画家の生涯と作品を紹介しました。



「堤橋」1951年頃 50×60.5 cm  
油彩・麻布 青森県立郷土館蔵



「少女」12.7×17.1 cm  
油彩・板 青森県立郷土館蔵



「裸婦」27.4×19.3 cm  
鉛筆・紙 青森県立郷土館蔵

旧木造町の桶屋の長男として誕生した松木は、13歳の時彫刻家になるために青森市の仏師のもとに弟子入りしましたが、やがて油絵に心惹かれていきました。そして、生涯の友でありライバルでもあった棟方志功と出会い、棟方が設立した洋画団体「青光画社」でともに活動しました。

また、木造の文化サークル「土曜会」に参加して、白樺派の影響を受けた松木は、美術のみならず文学や演劇にも関心が深く、1938～39年にはかねてから憧れていたフランスに渡りました。日本の漆器や屏風の修理などをしながら二つの画塾で人物デッサン等の基礎を学び、お気に入りの絵を見るために美術館巡りをしていました。フランス滞在中には、油彩画数点と多数のデッサンを制作しました。

戦況厳しくなる中1年半で帰国しますが、帰国後の作品は、華やかなカラリストに転身していたと言われます。「堤川」(左上)も大胆な筆致で、青や黄、白など明るい色彩を使い、光が満ちたような画面になっています。松木は戦後堤川沿いにアトリエを立てて住んでいました。今も諏訪神社の向かいの川沿いにアトリエ跡が残されています。

また、馬を描いた作品も多くあります。馬に対する思いは強く、人物、樹木、湖などと組み合わせて描き続けました。

1959～60年には、東奥日報に「青森県の素描」を連載、このために県内各地をスケッチして回りました。墨筆で描かれ、やさしい色で彩色されたものもあり、これらを紹介したところ、参加者から当時の県内の様子が懐かしく思い出されるという感想もありました。

当館には、平成30年度にご遺族から新たに寄贈された作品や資料もあります。そのうち現在油彩画7点の修復を終えていますが、「少女」(左中)はその中の1枚です。モデルは彼の娘で、穏やかで優しい表情で描かれています。

松木の本県の美術界における功績は、なんととっても人を育てたことだとも言われています。親切で義理堅く、芸術に対しては常に真摯な姿勢で望みました。また、聞く人誰もが抱腹絶倒させられる話術で、その身を置くところ千客万来で実に賑やかなものでした。友人や後輩たちの回想は特別の尊敬の念を持って語られているものばかりです。

本県の美術界を長年けん引してきた画業を讃えられて、青森県文化賞(1959)、第1回青森県褒賞(1962)を受賞しています。  
(美術担当 中村理香)

